

[書評]

ジョン・アグニュー著  
グローバル化と主権：  
領土の罫を超えて（第2版）

John Agnew  
*Globalization & Sovereignty:  
Beyond the Territorial Trap, Second Edition*  
Rowman & Littlefield, 2017

川久保文紀

1. 本書の特徴と構成
2. 各章の概要と抄訳

### 1. 本書の特徴と構成

本書『グローバル化と主権：領土の罫を超えて』は、著者であるジョン・アグニュー特別荣誉教授（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）が、固定的かつ静態的なアプローチに終始してきた政治学や国際関係論に対して問題提起を促した著作である。アグニュー教授は、主権と国益の発露を前提とする国家の安全保障と、それらの基礎にある領土や国境の呪縛から逃れようとするグローバル化現象が、時代状況によってどちらか一方が優位

に立つという二項対立的な構図を批判的に理解しようとする。このような見解は、評者の専門とする境界研究（ボーダースタディーズ）に対しても大きなインパクトを与えており、グローバル化の進展による「脱領域化」と9・11テロ以後の安全保障の強化に伴う「再領域化」が相互構成される現象であることを示している。これは、国家主権の独占的な管理規制機能が、重層的な空間レベルや多様な民間のアクターに再配置されつつある今日の国際社会の領域秩序を把握する上で有益な見方となる。

アグニュー教授は、1976年にオハイオ州立大学で政治地理学の博士号を取得し、1996年よりカリフォルニア大学ロサンゼルス校において政治地理学やヨーロッパ政治（とくにイタリアやギリシャ）などの教鞭をとっている。2008年から1年間、米国地理学会（Association of American Geographers）の会長を務めた。2015年来日し、九州大学において特別講義を行い、評者はその講演を聴く栄を得た<sup>(1)</sup>。その講演の内容は、評者による解説・拙訳「グローバル化時代の地政学」としてすでに発表されている<sup>(2)</sup>。研究業績は多岐にわたるが、2015年以降に発表された本書以外のものとしては、With M. Shin, *Mapping Populism: Taking Politics to the People* (Lanham MD: Rowman and Littlefield, 2019); “Too many Scotlands? Place, the SNP and the future of nationalist mobilization,” *Scottish Geographical Journal* (2018); With M. Coleman (eds.) *Handbook of Geographies of Power* (Cheltenham: Elgar, 2018); With M. Shin, “Spatializing populism: going to the people in Italy,” *Annals of the Association of American Geographers*, 107 (2017); With S. Stephenson, “The work of networks: embedding firms, transport and the state in the Russian Arctic oil and gas sector,” *Environment and Planning A* 48 (2016), 558–76; With S. Rolf, “Sovereignty regimes in the South China Sea: Assessing contemporary Sino-US relations,” *Eurasian Geography and Economics*, 57 (2016), 1–24などがある<sup>(3)</sup>。

本書の初版は2009年に出版されたが、2017年までに世界で生じた大き

な変動をふまえて第2版が2018年に出版された。具体的な事例を挙げれば、中国の南シナ海における海洋権益をめぐる覇権主義的な動き、現在のロシアによるウクライナ侵攻の前触れとしても捉えられるクリミア半島の併合、英国のEUからの離脱、ヨーロッパや米国におけるポピュリスト運動の激化、シリア内戦による難民危機、2008年のリーマンショック後の世界不況など、枚挙にいとまがない。このような変動の多くは、グローバル化から主権の高まりへと歴史的な振り子が大きく揺れ動く動向として理解できるかもしれない。しかし、本書では、グローバル化の開始によって、国家の領土主権が直接的に傷付けられたことがなかったように、領土空間に対して均等に行使される絶対主義的な国家主権への逆戻りもあり得ないと主張される。本書の副題にもある「領土の罟 (territorial trap)」とは、1) 国家が主権の固定化された単位として無自覚的に措定され、国家の形成や崩壊のプロセスを描写できなかったという点、2) 国家の領土を対内的／対外的という2つの境界線で区切ることによって、異なる空間スケールでの相互作用を把握することができなかったという点、3) 領域国家はこれまで単一の社会を前提とする「権力の容器」として理解されてきたために、それ以外の要素である軍事主義、国際金融、宗教的原理主義などを問題の視野にいれることができなかったという点である。アグニューが提起した3つの問題提起は、領土ナショナリズムにもとづくに国家間対立のエスカレーションに警告を鳴らし、領土・国境問題の社会的構築性とイデオロギー性に着目して冷静に議論していくことの重要性を喚起させたのである。本書の構成は以下のとおりである（全278頁）。

## 目次

### 第2版の序文

### 第1章 グローバル化と国家主権

### 第2章 主権神話と領土国家

### 第3章 主権レジーム

## 第4章 稼働する主権レジーム

## 第5章 結論

## 2. 各章の概要と抄訳

第1章では、政治理論や国際関係論がこれまで前提としてきた主権及び今日のグローバル化が対立するという見方に対して、根本的な疑問を投げかける。アグニューはまず、国家がその領土を政治的にも経済的にも完全に独占したことはないと主張する。本書では、主権に関して、これまでとは違う視角からストーリーを語ろうとする。すなわち、近年のグローバル化の推進によって、国家の領土に対する排他的独占が弱体化している可能性を受け入れながら、主権と領土に関連する既成概念を打破しようとするのである。支配と権威に関する交渉と再定義は、主権に関する議論の条件を変化させる。本書の主眼は以下の3つである。第一に、国家を超えた支配と権威の拡大を理解し、地理的な組織や領域性としての主権の行動様式を絶対視しないこと、第二に、様々な「主権レジーム」（様々なグローバルな状況において対内的かつ対外的に行使する国家能力）の歴史的・地理的な事例を検証すること、第三に、「主権レジーム」が近年どのように作動してきたのかに関して、通貨と移民を具体的な素材としながら示すことである。政治地理学やその他の分野における最近の研究から得られた2つの基本的な結論は、主権は本質的に領土的でもなければ、常に国家を基盤とするものでもないということである。

第2章では、領土化された主権に関する言説が、3つの連動した「神話」に還元されてしまう傾向について論じられる。それらは、1) 近代国家の形態が人間の身体に類似しているという身体・政治メタファー、2) ハイフン化された国民=国家、3) すべての国家が主権を同等のレベルで行使し、領土内に排他的管轄権を有しているという前提のことである。これらのうち、最初の2つが「対内的」な主権や領土の支配に関係している

とすれば、3つ目は絶対的な領土主権を世界政治と結び付ける「対外的」な領域を推定している。このような主権に関する言説の多くは、研究者も実務家も自明のこととして受け止めていることが多い。そして、世界（政治）地図が簡単に可視化されることによって、世界の政治経済の複雑さや国境の多くが不安定であることを隠蔽してしまう。3つの神話とは、主権と領土が一体化されてきた世界観に対する知的挑戦としても捉えられる。要するに、主権とは、これまで唱えられてきた「理念型」ではなく、時空を超えて変化する「実践の制度形態」なのである。世界の不正義や不安のパターンは、簡単に領土化されるものではなく、領土化された神話がまさに根底にある主権という文法は、世界の複雑化する構造や動向を透徹するには厄介な障壁となっている。

第3章では、国家性に対する「地-社会学（geosociology）」のアプローチが現代の主権を理解するための最良の基礎を提供すると論じられる。アグニューは、4つの主権レジームを類型化することによって、これまで支配的であったモデルに対して、「実効主権（effective sovereignty）」というオルタナティブを提示する。「実効主権」とは、絶対主権に代わる概念であり、「領土や固定化された国境に基づかない」分割可能で機能的な主権概念のことである。これは、絶対主権を「絶対」として捉えずに、主権のバリエーションを前提とし、主権国家システムの原型となったとされるウェストファリアモデルを神話あるいは虚構として認識する。そのうえで、国家主権が権力の強弱と領域性の観点から4つに類型化されるレジームとして理解され、アグニューはそれを「主権レジーム」論と呼ぶ。主権レジームとは、中央の国家権威（専制権力）と国家の領域性（インフラストラクチャー権力）の特徴的な結合から生じるものである。これは、社会学者マイケル・マン（Michael Mann）の分析にもとづいており、古典的国家（ウェストファリア型国家）、統合的国家（欧州連合モデル）、帝国主義国家（ジャクソニアン的な「準国家」）、グローバル国家（覇権主義国家）である。

1）古典的国家は、中国と台湾や香港との関係などを除くウェストファリ

ア型の国家モデル、2) 統合的国家は、欧州連合 (EU) に代表されるような統治のレベルが多層的な国家モデル、3) 帝国主義国家は、世界政治におけるヒエラルキー的な構造とネットワークに張り巡らされた国家モデル、4) グローバル主義国家は、米国のようなヘゲモニー国家が他国やアクターを強制的あるいは協調的な政策によって自国のレジームへと引き入れる国家モデルのことである。このような主権の多元的な理解は、近年の学術的及び一般的な考え方のなかに典型的に見られる、グローバル化あるいは主権のどちらかを支配的な傾向とする一方的な論理から距離を置く。

第4章では、現代世界において稼働する主権レジームを実証するために具体的な事例を取り上げる。第一の事例は、各国の通貨政策と、それらが様々な種類の為替レートメカニズムを通じて相互にリンクしている方法である。通貨は、経済現象だけではなく (研究では経済的な側面ばかりが強調されてきた)、それはまた政治現象でもある。通貨は、国民国家の存在と権力を日常生活において、実践的かつシンボリックに表象している。こうした議論は、今日のすべての通貨が、グローバルな関係空間のなかに存在するようになったことを示すために行われる。第二の事例は、移民の管理・統制である。ここでは、古典的な主権国家は、文化的に均質な人々が存在し、どの人物の入国を認め、あるいは認めないのかを、厳しく管理する国境を前提としている。しかし、文化的な均質性を完全に保持する国家が存在することなどほぼあり得ないのであり、多くの国家では、ひとつの文化と領土との間の自明な同一性に挑戦する移民の圧力を受けている。移民の事例は、世界が個別の領土に封じ込められて存立しているのではなく、空間を超えた相互作用が常に生み出され、移民が新しい状況に適應する方法において、いかに既存の場所を移民のニーズや希望に適合させるように作り変えるのかを示すという点で優れている。通貨の為替レートの取り決めや移民や市民権の管理・規制に関する国家の対応の違いは、過去の経験に基づく政府による認識の差に起因するが、それ以上に、すべての国家が等しく主権を持つわけではないというヒエラルキーの影響及び主権が他の国

家や多様なアクターと共有され、あるいはプールされているという事実によるものである。それらの多くが稼働する方法は非領土的なものである。

第5章の結論では、冒頭部分において、われわれが生きている政治世界は、それを枠組みづける伝統的なスキームでは、その複雑さを理解することは困難であるとする。プラトンの「洞窟の比喩」のように、外部世界で生じていることは、壁に映った影をおぼろげに知覚しているに過ぎないのである。複雑さを理解するために求められることは、根拠のないアイデアにもとづいて過度に物事を単純化したり、あるいは検証することのできない事例研究へと安易に向かわない知的態度である。グローバル化と主権のストーリーを語ろうとすると、双方ともそのような事例に満たされていることが分かる。

これらを方法論的に乗り越えるためには、どのようにすればよいのか。ひとつは、社会科学が全体として軽視してきた、ネットワーク化された空間的相互作用（spatial interaction）と日常の政治における場所創出（place-making）の役割を見直すことである。もうひとつは、「主権レジーム」の観点からグローバル化と主権の関係を考察することによって、グローバル化が同質化というよりも地理的に差異化を強めているという認識をもつことである。最後に、政治学や国際関係論において支配的であったウェストファリアモデルに基づく主権国家システムが、現実の政治世界の在り方をなぜうまく説明できなかったのかに関して、国家間のヒエラルキーやその支配や権威を十分に描写できなかったという点、及び支配や権威の地理的表現が不変的に領土偏重主義に陥ってきたという点を再度強調して、本書を締めくくっている。

アグニューの研究を踏まえれば、「領土とは何か」という根本的な問いに対してアプローチする必要もみえてくる。スチュワート・エルデン（Stuart Elden）が指摘するように、領土・国境紛争に関する研究の蓄積は著しいが、領土概念それ自体に迫る研究はあまりみられていない<sup>(4)</sup>。これは、領土が理論的省察の不必要な自明の概念であり、領域性の帰結とし

て、あるいは主権を「境界づける空間」として理解されてきたからである。「権力の地理的配分」として「政治」を再定義することによって、政治地理学を復興させてきたアグニュー自身の知的貢献は、領土が空間性のひとつの形態であり、権力の空間性も国家の領域性に還元されるわけではないと主張する点で独自の意義が認められるが、領土概念それ自体を歴史的かつ概念的に検証し、それに有機的に関連する領域性、境界化、ナショナリズム、アイデンティティ、(領土の)不可分性、社会的な凝縮性といった諸概念との接合的分析も重要になってくるであろう。

#### 注

- (1) 2015年11月23日、九州大学箱崎キャンパス国際ホールで開催されたボーダースタディーズ福岡シンポジウム「“領土”という呪いを考える」(主催：九州大学アジア太平洋未来研究センター「ボーダースタディーズモジュール」／北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター「境界研究ユニット」)。
- (2) ジョン・アグニュー (川久保文紀訳)「グローバル化時代の地政学」『境界研究』No.6、2016年、1-17頁。
- (3) カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) 地理学部のホームページ。〈<https://geog.ucla.edu/person/john-agnew/>〉
- (4) Stuart Elden, *The Birth of Territory*, Chicago and London: The University of Chicago Press, 2013, p.3.

付記：本書評は、科学研究費補助金 (基盤研究C)「国境の壁をめぐる国境産業複合体とガバナンス形成—米墨国境地域を事例として」(課題番号JP20K01526)の研究成果の一部である。